

→『光秀の定理』の舞台、長光寺城を訪ねて

2020.3.8 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 555 回 参加報告

山の裾野の道沿いにく長光寺城登り口>の説明板があった。長光寺城は「瓶割山(かめわりやま)城」という別名をもつ山城で、元亀元年(1570)、柴田勝家が近江守護佐々木六角承禎(義賢)と戦った際、城中の水瓶を打ち割って城兵を奮い立たせ、戦いに勝利したことから「瓶割り柴田」の異名をとったという有名な話がある。奥の空地の山際に登り口らしき道があった。大岩がかぶさるようにそびえた道である。「この道は、三の廓へ出ますが、私たちは日吉神社の横から一の廓(主郭)を目指そうと思います。垣根さんが描いている4つの道の一つです」と説明があった。長光寺のご住職が「東側の登城道の二つは現在埋没していて通れないようです」と仰っていた。

次に日吉神社に向かう。雨は小雨になったが、未だ止まないでいた。石段が滑りやすいので注意をという声に喚起され、慎重に上る。応仁2年(1468)、六角高頼と対立した佐々木政堯(まさたか)が最初に長光寺城を築城した時に、近江坂本の日吉大社から勧請した分社だと思われる、とのことだ。本殿の左側に登城道があり、片道360mと記された立て札があった。希望者だけが登り、他の人は次のポイントで待つことになった。主郭まで約15~20分だ。お天気がよければ観音正寺城があった織山(きぬがさやま)が見えるはずだったが、あいにく、それは見えなかった。たぶん、織山の本城と、狼煙で合図を送りあっていたのだろうと、想像してみると楽しくなった。下り道は、滑りそうだった。二人ほど、現に滑ってズボンを汚されていた。僕はそれを見て、余計に注意して一步一步山道を踏みしめて下りた。

「不二の滝」がある瓶割庵公園で、登城しなかった人10数名が東屋に座って待ってくださっていた。皆が揃ったところで、横井先生が「この道を、光秀は駆け上がったと小説には書かれています」光秀は、信長から近江攻略の初戦としてこの城の攻略を命じられ「北東の妙経寺口から山道を進めば、7割5分の高確率で伏兵は存在しない」と賭けに出て、「妙経寺の横に馬を打ち捨て、境内の横から延びる山道を一斉に駆け上がっていく。駆け上がりながらも、光秀はまるで念仏でも唱えるかのように心中で繰り返していた。四つに三つ、四つに三つ……、伏兵は、存在しなかった。」(『光秀の定理』文庫・p.328より)とあり、攻め勝ったことを狼煙で本陣に知らせ、信長を狂喜させている。「その光秀が駆け上がった道を、今から下りていきますね」と

横井先生は言い、妙経寺へ向かった。

解散駅の近江八幡駅へ向かう途中、上田氏の創建という篠田神社へ立ち寄った。「篠田の花火」という国の選択無形民俗文化財選定の仕掛け花火の祭事が、毎年5月5日に行われているらしい。今日の締め括りに、新幹線の高架が篠田神社の参道を跨いでいて、その東に石鳥居、西に境内がある面白い光景の参道を歩いていった。



妙教寺



篠田神社前

<報告：田淵浩一>